

頑張らないと駄目だと気づいて

荒 寿子さん



インタビュー日時：2023年9月26日

インタビュー場所：双葉屋旅館

聞き手：菅野美紘、陣野祥汰、清野美咲、岡部桃葉、久保田彩乃

プロフィール

1960年4月4日生まれ。福島県南相馬市小高区出身・在住。小高小学校、小高中学校、原町高校、東邦音楽大学を卒業後、1年間の講師経験を経て、中学校音楽科教諭として福島県の教育に尽力された。令和3年3月に定年退職。令和3年度から令和5年度現在は飯舘村立いいたて希望の里学園で再任用教諭として勤務されている。

1. 教員としての話

★中学時代の音楽の先生に影響され同じ道に

—なぜ中学校の音楽の先生になろうと思ったのですか。

荒：中学校の音楽の先生の影響があるかもしれません。小さい時からピアノを習っていたこともあり、進路で音大を選択しました。

2. 教員の立場での被災体験

★被災当時の様子

—2011年3月11日当日、どこで何をしていた被災をしたか教えてください。

荒：浪江中学校で被災しました。震災当日は卒業式でした。私は2学年の学年主任で吹奏楽の顧問でもあったので、入退場の演奏などを担当しました。卒業式が終わり職員室に戻って、みんなで昼食をとっていました。それで次の日は部活動があったので、会場は式場のままで次の日に片付けをしようとなり、楽器はそのままでした。生徒たちと「さよなら」をして、昼食後に職員室で次の日の部活動で使用する課題曲の印刷をかけていました。その準備をしていた矢先のことです。ガラガラガラッと(揺れが)きたんです。

—その後はどうしましたか。

荒：揺れが始まり校舎から避難するために校庭に出て、校長先生の車の中でテレビを見て津波を知りました。その間に(近隣の)幼稚園の子どもたちも中学校の校庭に避難しに来ました。みんな怖い、怖いと言い、私たちもどうしていいか分からないので…。でも、浪江中学校は町の中だったから、津波の被害は何もありませんでした。また、子どもたちがどうなってるか分からないので、揺れが収まった後に会議室に先生方が集まり、そこから担当学年の状況確認のため家庭訪問に行くことになったのです。2人体制で。私と女性の先生と車で出たら、悲惨な状況でした。建物が倒れたり、つぶれたりしていました。

—家庭訪問はどこまで行かれたのですか。

荒：通学区域に向かって山の方に(大堀¹方向)に行きました。色々なものが崩れていました。家庭訪問先で「大丈夫か」と聞くと、「大丈夫です」って。「じゃ、よかった」と言葉をかけることが何度となくありました。そして、学校に戻ったら体育館が避難所になっていました。そして、あの時すごく寒かったのを覚えています。だから、毛布とかそういうのを野球部の生徒たちが運んでました。あとは温風ヒーターも。体育館に敷く緑のシート、あれだけだったんです。それで(卒業式で使った)紅白幕も張ってあり…。後から聞いたところによると、ステージに屋根が落ちてたっという話だから、被害は相当なものだったと思う。もう楽器はそのままですよ。その後、「浪江に住んでいる先生以外は帰るように」という指示があり帰ったんです。やっぱり道中どんなになってるか分からないから、近くの先生の車に乗せてもらって、私の車は校庭に置きっぱなし

¹福島県双葉郡浪江町大堀 南相馬市より20km程度南に位置する。

にして家に帰りました。

★ご自身の避難について

—その当時、先生はご家族と小高にお住まいでしたか。

荒：その時大学生の息子と旦那と、私とおばあちゃん。おばあちゃんって私の母親で、父親はその前に亡くなったから。

それでうちに着いたら誰もいないわけです。もう、心配になりますよね。息子はたまたま友達と会ったから、全然連絡がつかないんです。でも、そのお友達のおうちの方に送ってきてもらったから、無事会えました。母親とも会えました。その夜は区役所に行きました。すごく近いんだけど、家には帰らずにそこで泊りました。

—区役所の状況はどうでしたか。

荒：その区役所にはエアコンが付いていて、一晩中電気がついていて安心でした。すごく寒かったってということはないです。その2日間私がやったことは、ひたすらおむすびを作ってた。炊き出しですよ。作ったものをどんどん運んでいました。

—他にその時の印象に残っていることはありますか。

荒：教え子が消防団員として津波で被災した人の捜索に当たっていました。行方不明者の名前が区役所の入口に張り出されるわけです、名前が。それでその教え子にたまたま会い、「先生、大丈夫か」って聞かれ、「大丈夫だよ」と言って、「あなたの家族は？」と聞くと、「いや、見つかってないんだ」って。それどころじゃないって。自分の家族よりも周りの人。大丈夫かっていう話をしてたのは、記憶にあります。自分の家族は分からないって。そこでやっぱり仕事への使命感ですか。いろんな仕事があるけども、その人はそうだし、あとは避難所のためにやってる人っていうのは、自分は何をするかっていうことをそこでやっぱり考えますよね。もうその次の日に、浪江がもう避難になったんです。原発が爆発したから。

—それは何で知ったのですか。

荒：学校から連絡が入ったと思います。電話かメールだったかな…。もう避難しますと。私たちも小高にいるから戻れないし、車も取りに行けないけど、もうここにいるしかない。先生方だって避難しなきゃいけないから、アパートに帰らずにそのまま避難だったと思います。そして13日に2回だかありましたよね。3号機の水素爆発。あの時に文科省にいとこがいて、もう避難するようにと言われ、もうその日に福島市の蓬萊のアパートに住んでいた妹のところに避難をしました。

—ご家族で避難されたのですか。

荒：そうそう。うちの主人は銀行員として飯舘村で仕事をしていて、当時もそこにいました。そして、私と息子と母親は、もう妹のところに避難させてもらうことにしました。1週間後、息子の大学が始まってしまうこともあり、千葉に住んでいた母親の妹のところに、旦那の車で大学生の息子と母親は避難をしました。

★生徒たちの安否確認

—荒先生はその後何をなさっていましたか。

荒：浪江中学校の生徒たちの安否確認が始まりました。担任に連絡を入れて、5クラスだったんですけども、ま

ずは担任から生徒たちに連絡をして、安否確認をし、確認が取れるとそのたびに泣きましたね。「先生全員オッケーでした」とか、「もう避難しました」って連絡が入るたびに、「そうか…」ってみんなで泣くの。これが先生の仕事なんです。確認をすると、みんなもう遠い所に行ってるのです。一時は、近くの所に避難したんだろうけど、調べてみるとある生徒は青森県に、また別の生徒は沖縄とか遠い所に行っていたり。「この子たちどうしてるんだろうな」って、ずっと考えてました。とにかく自分たち教員ができることは安否確認しかありませんでした。その後、私たちも招集がかかりました。浪江町内の小・中学校の全先生方に対して。

—それはいつどこに召集されたのですか。

荒：地震発生から20日後、3月31日だったと思います。二本松市のある場所に全員招集になりまして。その後、仕事の拠点が二本松になり、私も妹のところから引っ越さなきゃいけなくなってアパートを借りに行きました。その話を聞いた時、その場でもうみんなわーってなって、不動産屋に駆け込みました。だって、もう4月1日から仕事場所が始まるわけです、私たち何もしないわけにいかないから。旧木幡小学校という廃校になった学校で、そこで4月1日から仕事が始まりました。

—避難所は福島県内でしたか。

荒：県内。私行ったのは、避難所っていても温泉街とか。岳温泉⁵とかありますよね。浪江の子は岳温泉多かったです。岳とかあと土湯、飯坂温泉。あと学校だったら福島東高等学校とか様々な体育館が避難所になりましたね。もうかわいそうだった。私たちはアパートでぬくぬくとご飯食べれるけど、「この子たち、トイレだって、お風呂だって、どうしてるんだろう」と思うと、もう本当に何とも言えなかった。だって床が冷たいんですよ。体育館だし、畳とか敷いてたって。そういう姿を見ると、やっぱりもうつらかったです。避難所訪問は4月に入ってから。1週間に1回は必ず行ってました。浪江中学校が二本松市の針道で(仮校舎を)開校したのが(2011年)8月25日だったんです。その前、私は二本松市の東和中と兼務だったんです。兼務ってというのは、浪江中に所属しながら、別な学校に行ってお仕事をする。そこで音楽の授業をやらせてもらいながら、避難所に行って先生たちと保護者に会うことが安心する時間でした。

—子どもたちはどんな様子でしたか。

荒：子どもたちは学校でいろいろあるんです。大変だって。授業で原発とかの話になると、もうどきどきしちゃうって、つらいうって。何で私たちのこと分かってくれないんだろうっていうのが、子どもの叫びでした。あとは転校先で「どっから来た」と聞かれることとか。県内だけじゃなく、県外に行く子もいるじゃないですか。「なぜ浪江から来たの？」ってなった時の、その孤独さっていうものがありましたね。

3. 震災後、取り組んだこと

★バラバラになってしまった生徒を繋ぐ

—子どもたちが大変な様子だという情報は訪問によって得られたのですか？

荒：何でそういうのを私が知ったかという、私、学年通信(荒先生が当時受け持っていた生徒に向けて出した通信)を出してたんです。(2011年)4月に出しました。これを作った時、学年の先生や生徒会長に、「私、こういうことやりたいんだ。書いてくれない？」って頼んだら書いてくれました。そしてこれを全国に避難

している生徒たちに送ったんです。

その時の言葉は、「前を向きたい」という気持ちを感じました。例えばここ（当時の学年通信を指さしながら）、私が書いたんですけど、「仲間と離れての学校生活に慣れることへの不安はあると思います。私たちがついていきます。私たちが皆さん一人一人が夢に向かって進み、輝ける自分に出会えることを祈っています。必ず会いましょう」と。また別の先生も、「再開を楽しみにしています」って。みんなそうなんです。「さまざまな苦難との闘いになるかもしれない。何の罪のない皆さんにとっては、何で自分が思うことがある。そんな時、共に助け合い、浪江町で培ったたくましい精神力で乗り切っていきましょう」とか。「お互いの成長した姿で再開しよう」とか。“つらいつらい”じゃなくて、もう本当に前を向こうとしている先生方の言葉があったり、あとはこの生徒会長。私の家は、津波の被害はなかった。けども、原発の影響で、と書いてますね。また、「私は、怖い・不安からネガティブな考えしか持てなかった。でも、今はやっと心が安定し、少しずつ、本当に少しずつ地震という恐怖から離れられるようになった。しかし、みんなと離れた今、私の心には不安という渦が次第に大きくなっている。不安、いつ帰れるのかな。それが気になってしょうがない」というように綴ってくれたんです。そして、「今できることは、それぞれの学校で明るく自分らしく精いっぱい頑張ってお過ごしください。私も頑張ります。だから皆さんも浪江中学校に帰れる日を祈りましょう。会いましょう」って書いてくれた。そしてそれを全国に避難した生徒たちに送ったら、5月に、この彼女のところに色々なメッセージが返ってきたんです。「こういうのも載せたい。」というようなメッセージが。だから読んでくれたんだと思いました。こんなやりとりがあって、次に出した学年通信に載せたんです。「みんなばらばらでさみしいけど、みんなで頑張ろう」とか、「会いたいよ」とか、そういう一言一言、本当に短い文だけど、すごく重く感じるものになってて。

また、その後の学年通信では、震災の時、高校生だった秋田の高校に転入した子がこうやって頑張っていますよと、中学3年生当時の写真を載せて、ちょっと奮起させたりしたんです。そして8月。学校が1学期終わった時ですね。あと生徒会長や色々なところからメッセージが届いてたのでしょ。やっぱり中学3年生だから志望校受けるぞとか、高校合格とかって書いてくれたり、8月1日付けで開校することになったよって書いたり。こんなのがあって、2つ書いてもらったんです。高校に向けての意気込みっていうのと、あとはみんなへのメッセージ。やっぱり頑張っぺとか、福島弁っていうか、頑張らましようとか、みんなで自分のことだけではなく、やっぱり寄り添ってるのが感じられるものになったし、そして9月になって開校したよって、これは副会長にお願いして書いてもらったりしました。こんなやりとりをやりました。

—かなり手間も時間もかかりましたよね。

荒：1枚の学校通信を作るために、こういうのを作りたいからここに書いてくれないかっていう依頼をまず全国に避難をしている生徒たちに送って、原稿を取りまとめるという作業をしました。でもやりたかったのが校長先生から許可をいただいて始めました。生徒たちには、少しでも読んでもらいたいという思いがありました。

—他に何か全国に散らばってしまった子供たちになさったことはありますか。

荒：卒業文集です。でも、卒業アルバムって2〜3年間の学校生活があって成立するもんじゃないですか。この子たちって1〜2年生の時浪江中学校で、3年生になってみんな避難でばらばらになってるから、ここでも「なにかしたい」という気持ちになりました。なので先生方の手を借りて、卒業記念文集を作成しました。また、1,2年生のときの写真を使いDVDにして記念として送りました。いや、今見ても涙ですね。

—そうですね。

荒：『瑠璃色の地球』を学年の合唱曲にしたんです。文化祭の演劇で、合唱コンクールの場面を学年で作って、そし

て、最終的にはみんなで歌いました。音楽の教員として何かしたい、生きる糧にしてほしいと思って。震災後すぐのことでした。それがあって、浪江中学校に結局 10 年いたことになるんですね。もともとの中学校で 6 年いて、6 年だと思えます。そして……その後、二本松ですね。2016 年までいたと思えます。そしてその後飯館中。

—飯館中学校の仮設校舎に異動されたのはいつからですか。

荒：2017 年 3 月まで浪江中において、4 月からは飯館中学校でした。2019 年に一つの学年を仮設から卒業させたんです。

—飯館中学校の仮設校舎開校初年度は、大体中学校に何人来ましたか。

荒：20 人いたかな。そんなにいなかったと思ったな。大変だったって、私感じたことないです。本当に生徒と入られて幸せだった。その子たちが卒業して、次の年に新しい子が入ってきたりすると、また新たな気持ちでつてなるから。

—教員人生を振り返り、震災はどのような影響がありましたか。

荒：教員を始めたばかりの頃は、授業も無我夢中でやっていました。でも、20 代で壁にぶつかり、30 代で壁にぶつかり、40 代で壁にぶつかりで、その時その時に、ああ、辞めようと思いつつも続けてきました。でもやっぱり私にとっては震災の影響は大きかった。震災を境に「教員とは？」を改めて考えるようになり、もっと生徒と関わりたいと思いました。それで、定年後も再任用として、生徒たちと今でも関わっています。

4. 小高区民としての話

—ここからは、南相馬市小高の住民としての被災体験を伺いました。

★震災を経ての変化

荒：二本松に避難をし、安達太良山を見ながら私は通勤していました。4 月って桜が咲く季節じゃないですか。私、あの時全然桜はきれいだと思わなかったんです。いや、見たくないな、きれいじゃないなって。そのくらい気持ちがつらかったんだと思えます。震災でつらいつていう実感はあったんだけど、涙は出ない。「何で」つていう疑問符もなかったな、あの時は。すぐに帰れると思ったから何も持っていつてなかったの。重要なものも置きっぱなしだったの。

—震災後、最初に浪江町に入ったのはいつでしたか？

荒：浪江に入ったのが夏だったから、そのころだと思います。防護服着て、ちゃんと手続きをして。びっくりしたのは、車が田んぼの中にあるとか、あっちこっちにあって、それはつらかったですよね。これどうなるんだろうつて。あと海はやっぱり見れなかったです。今でも沿岸を車で走るのは怖いです。今まで感じたことのないような怖さがありますし、あとは海が近くなつて恐怖感があります。例えば震災前は小高から海の方を見ても、防災林がわ一つとあって見えないんです。家も立ってたし。でも、震災後はすぐ海の音が聞こえるんです、ざぶーんつて。いや、こんなになるんだと思つて、海には近付けなかった。でも私、それを勇気持つて行

くべきだった場所があります。それはもっと北のほう。宮城県とか岩手県とか、三陸のほうには私行くべきだったと思いました。ちゃんと目で見て、感じてくるべきだったと思いました。それがすごく後悔ですね。

—小高で生まれ育ち、震災後も小高で生活されていて、小高をどう思われますか。

荒：小高は好きです。小高って、やっぱり生まれ育った所だから、ほかにはない。ほかに住みたい場所があるかって聞かれても、やっぱり小高がいいんじゃないですかね。よく「第二のふるさと」とかって言うじゃないですか。例えば福島に住んで生まれたんだけど、仕事でどっかの県に行って、そこでの生活が始まると、第二のふるさとになったという人もいます。だから浪江の人たちは、全員が全員じゃないんだけど、ふるすとは2つあるって言う人もいます。浪江も生まれ育った所としてのふるさと。そして今いる所（避難先）もふるさとっていう考えを持ってる人もいます。でも私はここ（小高がふるさと）かな。

—現在の小高は震災前と比べて変わったことはありますか。

荒：今の小高があまりにも変わり過ぎていて。でも仕方ないと思うんです。人がいないわけだから。だから若い人がこの町に入ってきて、もっともっと活性化をすることによって、小高っていう町が改めて生まれ変わるんだろうけれども、やっぱりここで生まれて育った私にとっては寂しい感じがしないとは言えない。できれば、小高に移住して小高のために頑張っている人と交流する機会を持つことで、元からの住民と移住者がお互いを受け入れたりすることが、今の小高には必要だと思う。

—震災直後は混乱した状態でのスタートでしたが、震災後初めて浪江中の子どもたちと対面で授業できることになった時はどのような気持ちでしたか。

荒：それはもう、うれしかったですよね。子どもと会えたっていう喜びっていうのが大きいです。あとは一緒に生活できるっていう喜びですね。同じ空間に子供たちといれるっていうのは、やっぱり先生としては喜びになるんじゃないですか。一生懸命に関わってあげなきゃいけないと思いました。

—それが冒頭でおっしゃっていた「震災を機に生徒との向き合い方が変わった」ということですか。

荒：そうですね。（震災後に）色々な人と出会って、その出会いからすごく学び、私の中で何かが変わりました。子供たちは中学生ですからいれても3年とか。そんなに一緒になんていられないじゃないですか。私はその出会いは与えられたものなんだなと思うようにしてるから、ここにいること自体が与えられてるもの。だからその時間は無駄にはしたくないと思うし、いろんな言葉をかけてあげたいと思いました。だから子どもたちと過ごせて本当にうれしかったです。教員をやっててよかったなと思いました。

—逆に、苦労したことはありますか。

荒：苦労っていうか、つらいことはありました。やっぱりみんなに会えないから。だって本当は、浪江中に130人いたんです。130人なのに、戻ってきて、ここで一緒に授業やれるのっていうのは、本当に数限られた子だったから。

—震災後の授業で、震災を受けて変化した授業とかはありますか。

荒：私たちってふるさと学習とかやってるんです。地域学習。浪江の時、ふるさと学習でした。やっぱりその子供たちにとっては、浪江っていうのは生まれ育った所だから、浪江のことを知ったりして、自分たちに何ができるのかっていうのを取り組みの中で考えていく探究ですね。被災後に初めて卒業生を出して学年が変わっ

て出会ったその子どもたちとは、やはり一から浪江のことについて調べ考えました。仮設訪問したり、あとは自分たちで波江の事業所（二本松で再開したところ）に職場体験しましたね。浪江の人とのつながりを持つような授業をしてました。仮設のおじいちゃん、おばあちゃんって中学生とかちっちゃい子供が来ると、「元気もらうわ」って喜ぶんですね。それでそこで生徒たちが考えたのは、仮設の部屋の中で座ったままでできる運動でした。それもおじいちゃん、おばあちゃんが知ってる歌に合わせて体を動かすのを仮設訪問しながらやったり。あと、（浪江町のB級グルメ）なみえ焼きそばって知ってますか。その「なみえ焼きそば」の祭りに、スタッフとして仕事させてもらったりしました。こんな風に、浪江のためにできることを生徒たちと考え、実施しました。

—そのふるさと学習をやる以前とやった後で、子供たちの様子などに何か変化はありましたか。

荒：3年間一緒に一つのことをやり遂げた子供たちだったので、成人式に会った時には、やっぱり「町のためになる仕事をしてます」とか、「人のためになる仕事をしてます」って言ってました。消防署に勤めててとか、レスキューになってるとか、あとは先生になりましたとか、看護師になりましたとか、幼稚園の先生になってますとか、市役所に勤めてますとか、そういうことを話してくれました。やっぱり全部が全部ふるさと、地域学習だったからつながるっていうのはないけど、やってきたことは何かの糧になるんじゃないですか。

—なるほど。

荒：今年の9年生はいいたて学を行って3年目になるので、まとめの冊子を作るんです。だからその子たちも3年間地域学習（いいたて学）から何かを感じて、未来・自分たちの将来にもつなげていける、つながっていくような学習になればなと思っています。だからすぐには、じゃあ、卒業して大人になった時に、自分のふるさとが飯館だったら、飯館のために何かしてみようかなとか考えるようになってもらえればなって、願っています。

—これから「いいたて学」でチャレンジしたい事はありますか。

荒：同じこと言っちゃうかもしれないですけど、紙面上の中で終わらせたくないと思ったんです。教科書や資料から学ぶだけじゃなくて、行動を起こすってことです。やっぱり「知って学んでつなぐ」という。ちょっとまだまだなんですけど、私の3年構想。知る、学ぶ、そしてつなぐ。過去は現在につながっていきます。現在から自分たちは未来につなぐ。そして自分たちはさらにつないでいくという。分かります？7年生ではひも解く、語り継ぐ。郷土への愛着・誇り・思いがどこから生まれてくるのかを知った。そしてここでは、担い手の原動力って何か「働くとは？」なぜこの飯館のためにやってるのかを、職場体験を通して学ぶ。そして、未来。9年生は、未来の村のためにできることを課題にして取り組んでいます。自分たちもふるさとの担い手だから。じゃ、どんなつながりを生み出していかってということで、今回は商品開発と動画配信を行います。

—「いいたて学」を実際に子供たちにやらせてみて気づいた事はありますか。

荒：教員も生徒も結構頑張らないと駄目だっということに気付きました。こんなふうにやっぱり気付いて、ああ、そうだったんだな、ああ、っていう学びだけじゃなくて、そこから行動を起こしましょうと。行動を起こすということが今必要なんじゃないですか。

★子供たちとのかかわり

—今後、教員としてどうありたいですか。

荒：本当に真摯に子供と向き合い続けたいです。やっぱり子どもは大人がどれだけその子に向き合ってるかによって、反応は違うと思います。やっぱり人ですよ。子供たちが卒業後、人として生きていくために、やっぱり少しでも大人としての関わり方をしていきたいと思います。大人というか、人としての関わり方っていうんですか。



—東日本大震災を知らない子供たちに、震災を伝えていく事についてどう考えますか。

荒：知るべきことは知ったほうがいい。けども、前に進みなさいって言いたいです。その土地でこういうことがあった、すごく悲しいことがあった、つらいこともあった。それは受け入れて、でも、立ち止まっていちや駄目よって。自分たちは何ができるかっていうのを前を向いて考えていってほしい。

—そうですね。

荒：ああ、つらいな、つらいなだけじゃなくて、自分たちは何ができるのか考えることが大切だと思います。伝承館に震災当時のモノや写真いっぱいあるじゃないですか。でも、あれはやっぱり知るべきものだからある。忘れてはいけないものだからある。だけど、それだけで終わらずに、じゃあ、未来に向かっていくにはどうしたらいいかということを考えるのが大切なんだと思います。原子力発電をどうするかとあって、大人は大人で考えることってあると思うんです。でも子供は違った視点で考えるのが、よりいいと思います。

—では、小高の住民としては若い人たちに何を伝えたいですか。

荒：やっぱり前に進むのはすごくいいと思うんです。私、本当にそれはなくてはいけないことだと思っています。でも、やっぱりそこに至るまでの歴史があるわけです。だから私は小高の住人としては、新しいものを取り入れるだけではなくて、やっぱり昔からあるおじいちゃん、おばあちゃんの言葉とか、そういうものも大切

にしてほしいなと思います。

—最後に未来を担う子どもたちへメッセージをお願いします。

荒：いろいろな情報が簡単に手に入る昨今、その中で何が自分のためになるかを選択する力が必要になってきます。自分を信じて、何事にも挑戦していくことは、新たな自分との出会いにつながるでしょう。

これからの未来を担うみなさん。夢を叶える一歩を踏み出してください。

【学生の感想】

今回のインタビューでは、中学校教員という立場での被災体験も聞くことで、震災が与えた「人」の感情への影響なども学ぶことが出来ました。また、悲惨な思いをされたにもかかわらず、どうにか乗り越えていき、今の考え方や生き方につなげていくという荒先生は素晴らしいなと感じました。これからは、震災についてもっと調べ、私自身も震災をあまり知らない世代に伝え、2度と同じことを繰り返さないために今何ができるかを考えようと思います。

人間発達文化学類 1年 菅野美紘

私は今回のインタビューで初めて「被災された先生」の話を聞きました。ご自身も被災され今後の生活がどうなるかわからない状況なのにも関わらず、子どもたちのことを第一に考え、安否確認や学年通信を通して避難でバラバラになってしまった子どもたちをつないだり、現在も被災地でふるさと学習を行ったりしている荒先生の姿に感銘を受けました。私も荒先生のように、生徒想いで子どもたちに真摯に向き合っていけるような先生になれるよう頑張ります。

人間発達文化学類 1年 陣野祥汰

お話を伺っていく中でどれほど東日本大震災が残酷なものだったのが改めて知ることができました。被災した教育現場はとても大変だったことが良く伝わってきました。そんな大変な中でも荒先生は生徒たちのことを思い学年通信を作り上げていて生徒のことを強く思う気持ちに胸を打たれました。今回伺った貴重なお話を風化させないために、未来にこの教訓を生かしていけるようなアーカイブ活動が出来たのではないかと思います。

経済経営学類1年 清野美咲

自らも被災し大変な状況の中、常に生徒のことを思いやり行動に移した荒先生には感銘を受けました。また、震災の経験を悲しい過去のことで終わらせるのではなく、子供たちとの向き合い方に変化を起し授業にも取り入れ、これからのことを前向きに考えるという姿勢が素晴らしいと思いました。荒先生がおっしゃっていたように、昔からあるものを大切にしつつ地域のために自分に何が出来るか考え続けていきたいです。

経済経営学類1年 岡部桃葉